

社会の冷たさ「子育て罰」って？

「子育て罰」という言葉を知っていますか？
 2児を育てる記者(34)も、最初に目にしただけ、どきどきしました。子育て世帯に冷たい日本の政治や制度、社会意識を「子育て罰」と名付けたものですが、重い言葉の裏にはどんな思いが込められているのでしょうか。「子育て罰」を研究し、発信する日本大学の末富芳教授(教育行政学)に話を聞きました。

——研究対象として「子育て罰」に興味をもったきっかけを教えてください。
 もともとは、日本の教育費負担の高さに疑問を持ったことです。今は日大の教授をしています、経済的に苦しいという学生にたくさん出会います。話を聞くと、生活保護を受給できるレベルの家庭の学生もいます。日本では学費の補助が限定的で、大学に行くのが苦しい先進国のひとつです。

すべてが親の責任か
 ——ご自身が2人のお子さんを育てていて、「子育て罰」を感じた経験はありますか？
 たくさんあります。それぞれ、妊娠中からハラスメントを受けました。

——研究対象として「子育て罰」に興味をもったきっかけを教えてください。
 もろろん、経済的な負担も大変でした。2人の子どもは4歳差ですが、保育料無償化の恩恵を受けられなかったため、月々の負担は認可園でも10万円ほどでした。保育料は保護者の収入に応じた負担になっているとはいえ、0、2歳児の負担の大きさは異常だと思えます。2019年からは、住民税非課税世帯について0、2歳児の保育料は無償化されていますが、そうではない世帯にとっては「何のために働いているのだろう」と思ってしまうような額です。すよね。

——保育料はもろろん「子どもを育てるのにはお金がかかる」というのは、日本では「親の責任」「当たり前」のようにとらえられているように感じます。



そもそも、子どもを育てることについて、すべての責任や負担を親に求める思い込み、「親負担ルール」が社会の中にあることが、怖いことであると感じています。そんなプレッシャーを与えられた状況では、「子どもを持たないほうが合理的だ」という判断をする人が出てきてしまうことは、仕方ないことだとも思います。

「おかしい」声上げて

——子育て罰という言葉で、「子どもを育てるのは怖い」というイメージにつながる懸念も感じたのですが。

子育て罰の語源は、「child penalty」という言葉です。これを、立命館大学准教授の桜井啓太さんが、「子ども罰」ではなく、「子育て罰」と訳しました。「子育てをすること自体に罰を与えるかのような、社会の厳しい冷たさを批判する」という概念を表しています。

子育て罰という言葉が発信した当初は、やはり強い言葉に戸惑ったり、反対したりする人も多かったと思います。でも、SNSなどの発信を通じて、「子育て罰は、子育てをしにくい世の中の構造的な問題だ」という理念が浸透してきたように思います。

お金がかかりすぎることで、子どもを連れていくなかに社会からの扱いが冷たいこと……。これらは決して「当たり前」ではありません。当事者として「おかしい」と声を上げることが、これまで無自覚的にも子育て罰を強いてきた国、そして企業を変えるためのメッセージになり得ます。当事者が声を上げることで、現状を変えたい。そう期待しています。

(聞き手・中井なつみ)